

方正日本人公墓と世代友好碑

武吉 次朗

中国の杭州市西湖湖畔の柳浪聞鶯公園に、「日中不再戦」と書かれた石碑が建っている。1962年に当時岐阜市長だった松尾吾策氏が揮毫したものだ。中国侵略戦争期間、岐阜にあった旧陸軍歩兵第68連隊は、盧溝橋事変の翌月から戦争に参加した。その深い反省に立ち日中友好の誓いとして建立された、という経緯がある。他方、岐阜市の岐阜公園には日中友好庭園があり、王子達杭州市長（1962年当時）が揮毫した「中日両国人民世代代友好下去」（中日両国人民は世代代友好的にしていこう）の石碑が建っている。二つの碑文は1962年10月に交換され、翌年、両地にそれぞれ建立された。

国交正常化の10年も前に、このようなことがおこなわれたのは卓見と勇気によるものだが、もっと感銘を受けるのは、中国側の碑文を考案したのが周恩来総理だったことである。私はこのことを、1964年に杭州で「日中不再戦の碑」を参観した際にうかがった。それ以来、「中日両国人民世代代友好下去」は、中国の対日方針の基調となり、力強い呼びかけとなって、中国の歴代指導者により唱えられている。周総理自身も、1972年に田中角栄首相が国交正常化のため訪中した際の歓迎宴会で、公式にこの言葉を使った。

長々と二つの石碑について書いたのは、方正の日本人公墓が1963年に周恩来総理により許可されたことを知ったとき、ほぼ同時期に岐阜の碑文が決まったことを思い出したからである。

思いおこせば1958年、日中貿易が全面中断の事態になったのは、当時の岸内閣が露骨な中国敵視政策をとったことへの中国側の対抗措置だったが、その後日本側で日中関係打開を政府に要求する運動が起こり、やがて日米安保条約反対闘争の一環に発展していった。当時の政治環境では、安保反対と中国敵視政策反対は表裏一体になっていた。このような盛り上がり背景下、周総理により中日関係の政治三原則が提示され、貿易三原則に基づき友好貿易が発足、つづいて半官半民の覚書貿易も始まり、1963年には北京と上海で日本工業展覧会が開かれ、毛沢東主席はじめ中国首脳がこぞって来訪、参観した。同年秋には中日友好協会も誕生した。この数年間には、わが国の各界各層から多くの代表団が訪中し、中国側と共同声明を出してもいる。また、国交正常化の暁には日本に対する戦争賠償請求を放棄するという中国側の重要方針も、この時期にしだいに形成されていった。

前記の碑文も方正の公墓も、このような時代背景のもとで、周恩来総理により決裁されたといえるのではなかろうか。

つまり、毛主席や周総理らの中国首脳は、日本軍国主義者と日本人民を明確に区別することを踏まえ、日本との友好関係を重視するとともに、日本の各界各層と協力して「以民促官」（民間の力で政府を促す）で実績を積み重ねていくことにより、国交正常化と世代代の友好が実現可能であると確信していたわけである。

※ ※ ※ ※ ※

では、中国首脳の「日本軍国主義者と日本人民を明確に区別する」という方針は、何時、どのように形成されたのだろうか。

まず、「万国の労働者、団結せよ」というマルクス主義の基本的な階級観が根底にある。

次に、第二次世界大戦後の連合国による戦後処理・戦後和解の方針という背景がある。つまり、第一次大戦後のドイツに対する巨額の賠償が「報復」感情を煽ったことを教訓として、戦争犯罪者と被害者の区別を明確にし、やはり被害者であった枢軸国の民衆との融和を促す、というものである。中国が東京裁判を評価し、A級戦犯が合祀された靖国神社への首相参拝に強く反対しているのも、これが下地になっている。

以上の2点を日本人民との友好の「必要性」あるいは「必然性」と呼ぶなら、もう一点、その「可能性」を実証した事例が、戦後間もなく、ほかならぬ中国の大地で起きていたことも、重視しなければなるまい。それが「留用」された日本人たちである。

「留用」とは、「一定期間留めて任用する」という意味の中国語だが、「留用」に人生を賭け、青春を捧げた日本人が、中国東北部に1万数千人（家族を含めると2万余人）いた。「留用」になった経緯と動機はさまざまだったが、初期は「戦争に負けたのだから仕方がない」と思う一方、持ち前の職人気質（かたぎ）から、与えられた仕事は怠けず手抜きせずやり遂げた。恐怖感をもたなかったのは、東北民主連軍（後の人民解放軍第四野戦軍）の規律が厳正で態度が穏やかだったからだ。

これに対応して、中国共産党は次のような政策を定めた。「留用の日本人は捕虜ではなく友人である。政治面では日本軍国主義者と明確に区別し、一視同仁にあつかう。仕事の面ではその技術を尊重し、努力を信頼する。生活面では同等に処遇し、可能な範囲で配慮する」というものだった。

同じ釜のメシを食べ、同じオンドルで起居するうち、日中双方にあったわだかまりが消え、連帯感が芽生えてきた。日本人に最も深い印象を与えたのは、中国共産党幹部の人間的魅力だった。「人民に奉仕する」とはお題目でなく、毎日接する上司たちの言動そのものだった。人生、意気に感ず。「留用」された日本人たちは、日本の軍国主義者と民衆とは違うのだということを身をもって示した。言い換えるなら、戦争で破壊された中国との友好を自らの汗と血で修復した、とさえいえる（もっとさかのぼれば、中国侵略戦争期間における日本の反戦兵士の存在も忘れられない）。

このような事績を踏まえて、周恩来総理は1954年10月11日、日本の国会議員訪中団と学術文化訪中団と会見した席で、次のように語った。「われわれは15年戦ってきたが、日本軍が武器を捨てたときから、日本人は中国人と仲良くなり、中国人も日本人を友人としてあつかい恨みをもたなかった。最も生き生きとした事例が東北にある。多くの日本人が武器を捨てたのち帰国せず、一部の居留民とともに中国人民解放軍に参加した。病院の医師と看護婦、工場の技師、学校の教官……ほとんどがりっぱに働いてわれわれを助けてくれた。われわれは深く感謝している。……これが友情であり、これこそが真の友情といえる。……これこそがわれわれの友好の種子なのだ。」

以上、わたしも体験した史実の一端を、ご参考まで書き綴ってみた。

くたけよし・じろう：1932年生まれ。58年中国から帰国。国際貿易促進協会、摂南大学国際言語文化学部教授を経て現在に至る。翻訳講座を長年亘り主宰。著書『新版現代中国30章』、訳書『中国の出稼ぎ熱とその行方』『新中国に貢献した日本人たち』など。